

渡辺温の小説「嘘」のはじめに

「雪降りて退屈で古風な晩であった。

井深君の邸に落ち合った友達が五六人火のそばに寄って、嘘吐き話の話しくらべをした。自分の素晴らしい嘘で人を担いだ話や、またはそのあべこべのしくじり話やらをめいめいが語った。

そしてさて、主人の井深君の番になった。井深君は、誰よりも一番多くその生れ付きの中に小説家的な要素をもっていたばかりではなく、日頃の生活も当り前の様式とは少からず異っていたので（それらの点はこの話を聞くだけでも直ぐ察せられる事なのだが）誰も斉しく井深君の番になるのを待ち構えていたのだった。

偽瞞こそあらゆる芸術の本体だ、と誰かそんな風な事を云った西洋人があった。嘘と云っても、それが何人にもどんな損害をも与えない場合になら勿論少しも悪かろう筈はない。昔噺をして聞かせるのとちっとも変りはしないのだもの。僕は御存じの通り非常な空想家だ。それだから、つい思わぬ無用な嘘を吐く時がある。何故と云って、空想を最も効果的に他人に伝えるためには、どうしても大きな嘘を吐かなければならない事になるのだから。」

という行があります。

インターネットがない時代には、小説のように、気の合った仲間が集って、嘘の吐き比べで、つい思わぬ無用な嘘を吐いても、どうしても大きな嘘を吐かなければならない事になっても、精々仲間内の諍いで終わり、人の噂も75日、元々親しい間柄、元の鞘に納まったってしまうことでしょう。

しかし、このインターネットの時代では、日本中否世界中の一生顔を会わすことのないブログ友達が、仮想空間のネットを囲んで、匿名という気軽さから、悪意の嘘で特定の人を貶めるという犯罪へと、誤って足を踏み外してしまいます。

今回のブログ炎上事件は、最初、気楽に書かれた「タレントが過去の殺人事件に関与した」というのデタラメな書き込みが、噂話として広がり、互いの面識のない様々な一般の人々が、不用意に便乗し、中傷を書き込み、なかには、本当に殺人犯と思いこんでしまっている人もいたという誹謗中傷の犯罪です。

ブログはネット上で、閲覧者が自由に感想などを書き込めるため、多くの人たちとの意見交換の場として、楽しい仮想空間ではありますが、一方で、常に、落とし穴が潜んでいます。そのことを念頭に置いて、自制しないと、いつ立場が逆転し、自分が被害を受ける危険性も多分にはらんでいます。自衛策として、根も葉もない中傷などは気にしない方がいいという意見もありますが、噂話がエスカレートして、顔写真や住所などまで書き込まれ、身の危険も感じるような極めて悪質なケースさへあると聞きます。

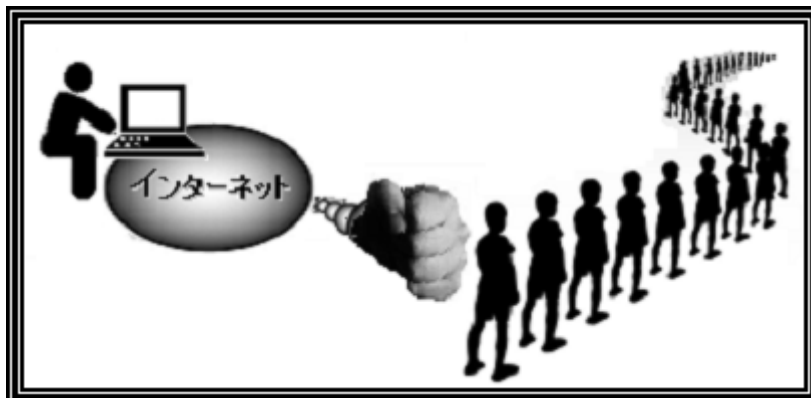
今回のケースでは、警察当局は、珍しく名誉棄損で一斉摘発をしましたが、表現の自由とからみ、書き込み内容の線引きは難しく、警察は利用者の納得する立件の判断基準を示し、より安全なネット利用ができるよう生かしてほしいと願います。

#### <インターネットの暴力>

インターネットで他者に対して心理的に制圧を加える力をいう。精神的暴力ともいい、いじめの手段の一つとなっている。

インターネットの暴力は、その存在と程度・与える影響とその程度について、加害者・周囲・被害者自身にとってさえ明確には分かりづらいため、被暴力者がどう防御・対処すればいいのが難しいが現状である。

しかし、「インターネットの暴力」という概念の社会への浸透にしたがって、加害者は、心理的暴力としての傷害の罪や、社会的暴力としての名誉棄損の罪などに問われる場合がある。



#### <渡辺温 (1902-1930) >

推理作家・幻想小説家。北海道谷好村（現・北斗市）生まれ。慶應義塾大学高等部卒。1924年、プラトン社の雑誌「苦楽」の行った映画原案に「影」を投稿し一等入選。1927年、博文館に入社、横溝正史編集長のもとで雑誌「新青年」の編集に携わる。1928年、創作活動に専念すべく博文館を退社するが、新青年編集部に戻職。

1930年兵庫県西宮市夙川の踏切で乗っていた自動車が列車事故に遭い、脳挫傷のため死去。谷崎潤一郎による追悼文「春寒」が「新青年」に掲載、翌1931年から同誌に『武州公秘話』が連載された。

その他、『父を失ふ話』『嘘』『氷れる花嫁』『可哀相な姉』『シルクハット』など。



#### 読売：「ネット犯罪統計：出会い系と誹謗中傷が増加」(08/8/29)

警察庁の統計によると、ネットワークを使った犯罪のうち「出会い系サイト規制法違反」が大幅に増加している。また警察への相談件数ではコミュニティサイトなどでの「名誉毀

損、誹謗中傷」に関する相談が増えている。

全国の警察が摘発した「サイバー犯罪（コンピュータ関連・インターネット関連）」の統計が発表された。それによると今年上半期の検挙件数は 2,192 件で、前年同期より 21.2% 増加。これは集計を始めた 2000 年以降で最悪の数字だ。たとえば 2004 年の 1 年間の検挙件数は 2,081 件だったが、今年は上半期だけでそれを超えている。猛烈なペースでサイバー犯罪が増えていることがわかる。＜中略＞

警察のサイバー犯罪窓口などに寄せられた相談件数では、「詐欺・悪徳商法に関する相談」「名誉毀損、誹謗中傷等に関する相談」「迷惑メールに関する相談」が目立って増えている。

「名誉毀損、誹謗中傷等に関する相談」が増えたのは、コミュニティサイトが増えたことが原因の一つと言えそうだ。掲示板だけでなく、SNS やブログなどの利用者が増えたことで、ネットでの名誉毀損と誹謗中傷が問題になっている。いわゆる「学校裏サイト」やケータイサイトの「プロフ」でのトラブルも増えている。＜後略＞

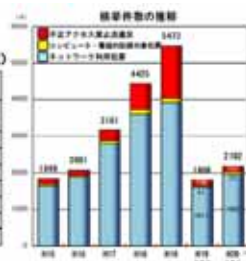
「ネットワーク利用犯罪」の内訳別検挙件数  
（警察庁「平成 20 年上半期のサイバー犯罪の検挙状況について」から作成）

罪名	2007年 上半期	2008年 上半期	増減数	増減%
詐欺	430	503	+73	+19.0%
児童買春(買付)	275	284	+9	+3.3%
児童ポルノ(買付)	96	117	+21	+21.6%
青少年保護育成条例違反	110	211	+101	+91.8%
出会い系サイト不正法違反	39	159	+120	+307.7%
麻薬法違反	118	117	-1	-0.9%
わいせつ物頒布等	84	95	+11	+13.1%
著作権法違反	127	78	-49	-38.6%
その他	372	307	-65	-17.5%
合計(ネットワーク利用犯罪)	1611	1907	+296	+18.4%

※1 児童買春・児童ポルノ法違反

サイバー犯罪に関する相談件数  
（警察庁「平成 20 年上半期のサイバー犯罪の検挙状況について」から作成）

相談内容	2007年 上半期	2008年 上半期	増減数	増減%
詐欺・悪徳商法 (オークション関係を除く)	12771	17054	+4283	+33.5%
インターネットオークション	7015	6089	-926	-13.2%
迷惑メール、誹謗中傷	4202	5492	+1290	+30.7%
迷惑メール	2011	2699	+688	+34.2%
迷惑メール	1747	2030	+283	+16.2%
不正アクセス行為	1668	1910	+242	+14.5%
その他	3654	4182	+528	+14.4%
合計	33058	39506	+6448	+19.5%



警察庁：「平成 20 年上半期のサイバー犯罪の検挙状況等について」(08/08/21)

<http://www.esquare-kamakura.net/netcrime080821.pdf>

### 春秋：「異例の名誉毀損での摘発」(2/7)

「おりからの強風にあおられて神社の本殿が燃焼し……」。その昔、こんな火事原稿を差し出してデスクに「バカヤロー」と怒鳴られた記者がいたそうだ。「炎上」と書くべきを「燃焼」とやったわけで、新聞社の伝説のたくいである。

誰が言い出したのか知らないが、被害のありさまを見ればこれもたしかに炎上に違いない。ネット空間の特定のブログなどに、たちの悪い批判や中傷が殺到する事態のことだ。お笑いタレントのブログに「殺人犯」「死ぬ」といった書き込みをしていた男女 18 人を、警視庁が名誉棄損容疑で書類送検するという。

このなかには北海道の女子高生もいれば関西のサラリーマンもいる。年齢も居所もまちまちな、まあ普通の人たちだ。それがデマや風説をきっかけに激しい言葉の暴力を繰り返して、抑えがきかなくなっていく。警察が摘発に乗り出すのは異例中の異例、あちこちで上がる邪悪な火の手に消火はとても追いつかない。

うまく操れば便利この上ないのに、使い方を一歩誤れば惨禍にもつながる。思えば、ネットという道具は人類がかつて得た「火」と似ている。ならばそれを扱うルールとマナーを、家庭で学校で社会で身に付けていくしかない。ブログを炎上させた人たちも、後味の悪さは燃焼もさせられず抱えていることだろう。

#### <言葉の暴力>

言葉で他者に対して心理的に制圧を加える力をいう。精神的暴力ともいい、いじめの手段の一つとなっている。学校の教員や父母などによる言葉の暴力は、広義の体罰に含む。



言葉の暴力は、その存在と程度・与える影響とその程度について、加害者・周囲・被害者自身にとってさえ明確には分かりづらいため、被暴力者がどう防御・対処すればいいのか難しいが現状である。

しかし、「言葉の暴力」という概念の社会への浸透にしたがって、加害者は、心理的暴力としての傷害の罪や、社会的暴力としての名誉棄損の罪などに問われる場合がある。

### 天声人語：「匿名に乗じた言葉の暴力」(2/7)

パリの裏通りを歩くと、たまにクラクションの合奏に出くわす。渋滞の源である配送車に、後続の車が遠慮がちに鳴らした一発。それがたちまち長い長い一斉射撃に転じ、荷下ろしの配達員をせかすのだ。「奏者」不詳の匿名性が、気と音を大きくする。

インターネットでの中傷被害が絶えない。匿名に乗じて、小心者が振り回す言葉の暴力だ。巨大掲示板での雑言は、例えれば公園で怒鳴り散らすのたぐい、ブログへの悪態は民家に土足で乗り込む拳だろう。

男性芸人が殺人事件に関与したというデタラメな情報をもとに、芸人のブログに「殺す」などと書き連ねた女が、脅迫の疑いで書類送検された。同じブログで中傷を重ねた17～45歳の男女18人も、名誉棄損の疑いで立件される。

住所は北海道から九州まで。互いに面識はなかろう。同じ民家で暴れた縁とはいえ、「覆面に黒装束」では男女の別すら分からない。だが書き込みの記録から発信元は割れる。警察がその気になれば、覆面は造作なくはがされる。

顔が見える集団討論でさえ、意見が次第にとんがり、結論が極端に振れることがある。匿名ゆえに責任感が薄まる場では、安易に同調し、論より情にまかせて過激さを競うような群集心理が働くという(岡崎博之『インターネット怖い話』)。

自由に発信できるネットにより、善意の輪が広がることもあれば、権力やメディアの所業が問われもする。「情」と「報」の海に紛れる悪意をどう摘むか。もはや言論の裏通りとはいえない存在だけに、交通整理の知恵がいる。

<岡崎博之 (1965-)>

東京都生まれ。電気通信大学中退、ロンドン大学キングスカレッジ校卒。文部技官、出版社勤務を経て、フリーランスに。

インターネットの普及で仕事や生活が便利になった反面、今までになかった“落とし穴”も増えてきた、プロフ、掲示板の危険性、ネット証券・オークションの危うさ、スカイプやアフィリエイトの実情など、さまざまなネット事情の現実を網羅した『インターネット怖い話』などで、インターネットの怖さを警告している。



他に『使える！悪用禁止の心理学テクニック』『殺人心理学入門』『使える！悪用禁止の心理学テクニック』などがある。

### よみうり寸評：「ネット世界の暴力」(2/5)

面と向かって、その人を罵倒（ばとう）したり悪口や中傷の言葉を口にするのはなかなかできない。それも根拠がないなら、なおのことだ。

が、事実無根の中傷でも、インターネットの匿名の書き込みだと、ためらいもなく暴言を浴びせることができるようだ。そんな集中砲火で、個人のブログが 炎上 する事件が目立ってきた。

警視庁がこの種の集団攻撃を摘発する。男性タレントの開設したブログに「人殺し」「死ぬ、犯人のくせに」などの書き込みが短期間に数百件も集中した事件で名誉棄損の容疑だ。

すでに容疑者の男女18人の自宅などを捜索、パソコンや携帯電話のデータを押収している。20年前の女子高生殺人事件に関与したと、いわれない中傷をした疑い。

インターネットの匿名性は悪をそそのかす魔力を秘めているようだ。透明人間にでもなったように、対面なら感じるはずの抵抗が失われる。だが、透明にはなり切れない。しっばはつかまえられる。

この一斉摘発で ネット世界の暴力 に歯止めがかかるといい。

### 読売：「ブログ炎上で初摘発...男性タレントに 人殺し」(2/5)

著名人などのブログに悪意の書き込みが集中して閉鎖に追い込まれたりする問題で、警視庁は、男性タレント（37）のブログを攻撃した17～45歳の男女18人について、名誉棄損容疑で刑事責任を追及することを決めた。

「殺人犯」などと事実無根の書き込みが繰り返されたという。警察庁によると、「炎上」と呼ばれる現象を引き起こす集団攻撃の一斉摘発は初めて。匿名を背景にエスカレートするネット世界の“暴力”に歯止めをかける狙いがある。



## 発信箱：「便利は不便」(2/8)

便利というものは不便とセットで存在する。失った時は、依存度の大きさに比例して喪失感を募らせる。

インターネットや携帯電話がまさにそうだ。文字や印刷技術の発明と並び称されるほどにコミュニケーションの形を激変させて、功罪両面の副産物を我々にもたらした。

英語に堪能な全盲の友人は、パソコンに音読システムをインストールして、メル友を世界に広げた。ハンディを越えて羽ばたくためのツールになった。

一方で、若者たちに「携帯がなくなったら」と問うと、「生きていけない」という答えが返ってくる。「死んじゃう」と涙を浮かべる少女もいる。

事実、自殺予防の電話相談ではここ数年、「メールや電話の着信拒否で仲間外れにされた」という訴えをよく耳にする。ネットの切れ目が縁の切れ目。現代版「村八分」のツールとしても使うことができる。

思いの丈を文字に記した手紙の時代には、じれったいほどの時間があった。人が互いに向き合って会話をする社会には、相手の息遣いや表情を感じた。それに比べて今は、何事も刹那(せつな)的に思えてならない。

昨今、携帯の学校への持ち込みの是非が問われている。背景にはマナーの欠如や、誹謗(ひぼう)中傷や犯罪がらみの裏サイトの存在が指摘されている。

上意下達で禁じる動きもあるが、規則には参加する者の心が伴わないと、「臭いものにふた」の発想にとどまる。

何事も使い方次第ではあるが、この際一つ、携帯問題を子供と親と先生がヒザを交えて話し合う格好の題材にできないものだろうか。

### <村八分>

地域の生活における十の共同行為のうち、葬式の世話(死体を放置すると腐臭が漂い、伝染病の原因となるため。また、死ねば全てを許されると言う思想の現れとも)と火事の消火活動(延焼を防ぐため)の二分の放置した場合他の人間に迷惑のかかる場合を除いて、残りの八分(成人式、結婚式、出産、病気の世話、新改築の手伝い、水害時の世話、年忌法要、旅行)一切の交流を絶つこと。

また、「八分」は「はじく」(爪弾きにする)の訛ったもので、十分のうち二分を除いたものというのは後世の附会であるとの説もある。

現代においては、放送禁止用語と考えられることがある。

余談ながら、1969年、柴田和志と山口富士夫を中心に京都で結成し、1969年、解散した「伝説」「まぼろし」と呼ばれている村八分というロック・バンドがあった。日本的な風情をもった攻撃的な楽曲を展開。ドラムスがズレようとおかまいなしに突き進み、時には客とケンカし、音源の発表よりもライブにこだわり続け、ボーカルのステージ上でのダンス、挑発的なが



らユーモラスなMC (Microphone Controller) 美声とは程遠いがなり声、「めくら」「びっこ」など現在では差別用語と言われるような過激な表現の歌詞など、アンダーグラウンドな雰囲気が漂うバンドであった。

村八分の名前と楽曲はNHKの放送自粛対象に指定されている。